

翻刻『会稽多賀堂』(下)

翻刻の会

一、底本には大阪府立中之島図書館の七行九十七丁本を用い、適宜、京都府立総合資料館、京都大学附属図書館の所蔵本を参照した。

二、底本を忠実に翻刻することを原則としたが、次のような校訂方針に拠った。

1 本文は文字譜を手掛かりにして、適宜改行を施した。ただし、道行・景事の類、会話の途中等では改行しなかった。

2 各丁の表・裏の終わりは、丁数の数字とオ・ウの略号を()で示した。

3 仮名は現行の字体に統一した。ただし、感動詞、送り仮名、捨て仮名の類以外の、本文中の「ニ」「ハ」「ミ」は「に」「は」「み」とした。

4 漢字は、一部の異体字を除いては、原則として通行の字体に統一した。

5 漢字・仮名ともに、誤字、脱字、当て字、仮名遣い、清濁は底本の通りとした。

6 特殊な略体、草体、合字等は現行の表記に改めた。

7 畳字は、平仮名は「ゝ」、片仮名は「ヽ」、漢字は「々」に統一した。ただし、「く」はそのまま残した。

8 文字譜の類はすべて採用し、本文の右傍の適切と思われる位置に翻字した。

三、本文の翻刻は、次に掲げる翻刻の会(学部学生の研究会)の会員によってなされた。

澤恵里香、城阪早紀、樋口吉男、江南昌樹、竹内淳之介。

文字譜、改行及び本文の最終確認は山田和人が担当した。

(山田和人)

ついたる折^{フシ}からに。組^{地色ワ}子引連九鬼数兵衛。ヤア作十郎の横道者。上をたばかり工^{たく}みの段々。遂^{ちく}一に頭^{あち}はれて殿の御機嫌^{もつて}以外。広庭^{ひろは}でお手討と御意を受た此数兵衛。引立に来つたりとの、しれば。様子^{ようす}を聞て驚^{おどろ}く姫。唐橋^ウ扱^ははと心に点^{ちく}き。誼^義意と有^あばぜひもなし。いざ御同道^{ごどう}サアあゆめと追取かこめど悪^{わる}びれす。是^{ハル}なふ待てととむる姫。押退^{おしひき}く広庭^{ハツミ}さして引立行。姫^{地ハルウ}はり、しく帯引^{おびひ}しめ。一ツ旦^{たん}定^{たん}まる殿様の安否^{あんひ}。生死一つと庭伝^{にはつた}ひ跡^{しこ}を。したふて三重へ。広座敷。政道^{地ハル}くもらぬか、み山。早枝殿の奥庭^{おく}先泉水。築山^ウ物好の。其風流^{キン}に引かへて。下部^{ハルキン}かはこぶ水(五十一才)手桶土壇^{下たん}の。拵^はへ調^{ハル}ひしと。言上^{ハル}すれば押^おひらく。障子^ウの内は銀燭台^{キンラク}昼かと。疑ふ金殿に。時元卿^{ウコハリ}は厳然^{げんぜん}と。切り柄^{つか}はめし新身^{あのみ}の刀。引さげて立給^{ハル}へは。左右を守護^{しゆご}する近習の大勢^{フシ}さも目^めさましく見^みへにける。太守^{地色ハル}仰出^中さる、は。作十郎^詞事幼少^{ようちう}より膝元^{ひざもと}にて育^{そだち}ながら。私の趣意^{しゆい}に我^{われ}を欺^{たぶ}かり。暇を乞^こはにつくさしれ者。ソレ引出せの壇^{地ハル}の下。はつと答^{こた}へる縄取^{なわ}に引立^ひられて唐橋^中は。死地^{しち}につく身も業^う因^{ごういん}と。諦^{あきらむ}れ共猶残^{ハル}る。無念^{むねん}は顔にあらはれて用意^{中フシ}の。席^{地色ワ}に座し居^あたる。兼て意趣^{いそ}有九鬼数兵衛。したり顔^{ハル}にのさはり寄。ハレヤレ唐橋^詞不便^{ひん}千万。執頭^{しやくとう}顔に羽^はをのしたも。(五十ウ)終^つには大小もぎ取^とれ。見るかけもない羽拔^{はぬ}鳥。コリヤヤイ三ヶ国^{さんかこく}の物知^{ものち}杯^はと。広言^{かうげん}はいた瀬左衛門^{せざゑもん}は学太郎^{がくたろう}様か辛^{から}さし料理。弟^{てい}の其方も殿の御^ご前^{まへ}で縛^{しば}り首。扱^はお手討に縁^{えん}の有。兄弟^{てい}では有^あはいと嘲^{あざわ}る詞^しに屈^くせぬ唐橋^{地ハル}。盛衰^{せいすい}は此身^{こみ}にかざらず。保元^{へい}には悪源太^{あくげんた}源氏嫡流^{げんじてくりゅう}の御身^{ごみ}でさへ。六条河原^{ろくじょうがわら}で縛^{しば}り首。善悪^{ぜんあく}共に皆天命^{みなてんめい}。サアさつはりと遊^{あそ}ばせと。色^{いろ}も変^へせぬ丈夫^{ウフシ}の一言^{ひとこと}。ヲ、よき観念^{くわんねん}出^でかしたり。生置^{なま}なは一方^{いっぽう}の役^{やく}にも立^たべきあた^あら若者^{わかし}。ぜひに及^{およ}ばぬ覺悟^{かくご}せいと。件^{けん}の一刀^{いちた}拔給^はへは。近^き習^{しゆ}は立寄手桶^{たちよてぶく}の水^{みづ}。さらく算^{かひ}のしげみにかくれ。(五十二才)息^うを詰^つたる折田平五^{せつだへいご}。欠出^{けだ}んくとあせり給^あふ

姫君を。じつととめて窺ひ居る。作十郎は覚悟の合掌。南無あみだ仏の声諸共。ひらめく利刃すつぱりと。作十郎か髻際切ッたる切先縄めもはらり。コリヤお手がそれたのか。どふ有ても助けぬと。唐橋めがけ数兵衛か。切込隙も新身の刀。後げさにどつさり。切捨給ふ御手の内人々驚ク計也。

ヤア騒クな旁。高知をも足りとせず。強欲非道の学太郎に。追従諂ふ人ン非人。家中の見せしめ身が手討。又作十郎か首は此髻。切取たれは禿の縁。某を欺んと及ハぬ工は小児の戯。小児なれば成長迄。罪を赦か国家の定法。周の穆王寵愛有彼慈童。過て君の枕を越る其時。群臣(五十二ウ)評義をなし。幼弱成リ逆命を助ケ左迁の身となし給ふ。其後慈童は山路に分ケ入。折しも盛りの菊の華に帝の情忘れ得ぬ。四句の文言書印。都の空を明ケ暮に拜して帝長久の念願をこらせしが。終に仙術を学び得て彭祖とよばれ。七百歳の寿を保し例汝逆も幼弱の。昔の因あんなれば。われ穆王の慈愛にならひ一命を助ケたり。作十郎は世を去って。今の姿は其俣に禿。くと仁愛も深き恵に有がた涙。スリヤ私が本心を。ホ、見拔し故に放埒を。却て加増応せしは。敵に油断をさせん為。又一つには。宝の詮議一途になさば。是ぞ天下の囚人にて。汝が願ひも(五十三オ)むそくならん。夫レ故わざととめしぞや。今髻を払ひしは主従の縁断切証拠。出家と成て修行になぞらへ本意を遂よ。コリヤ短慮を出さば御宝を。破脚せんも計れず。サ必々油断なく。兄か教養怠るなと残る方なき情の詞。ハア、心魂に徹する御教訓。ケ程の御恩を。顧ぬ。不忠至極の私が一命を助給ふは。エ、広大無辺の御慈悲心。よも此上の有べきやと勿体涙出廻にはたと。身を投ふしにくも。とろくる思ひ也。

漸に涙を払ひ。よしなき歎きは返つて恐し。只今君の給はつたる禿の文字。二つに分て法名を。喝儿と相改。今より後は雲

水のやどり。定めぬ三（五十三ウ）界無庵。名残は尽しおさらばと。お暇申立出るをヤレ待喝兒饒別せん此髻は命毛の無実
に絶るをとめし絆。修行の大願終りなば此髻を添に入。御大イ学の御前において。怨敵退散を修せん時の。降魔の利劍
を寄進せんと。投やり給ふ黒髪や裁く劍は来国吉。日も吉時吉頃も吉。早出立と出行喝兒。姫も俱にとかけ出るを。折田か
隔て折も待。又の再会互の胸。明て云れぬ仇討の。門出祝ふも心と心実。武士の。かゝみ山鎧を。跡にへ出て行

第七

代をこめて直なるは竹。曲れるは只浅ましき人心。身のたつきこそぜひもなき。（五十四オ）堤の上にみだれ共めんつを其
俣高枕。誠にくはず貧樂の其日暮しぞ氣さんじ也。

藤六は大欠。ア、さつても寝れは寝らるゝ物じや。コリヤじらよ。権よ。もふ起おらんかい。いかにおこしてがない迪。

日の暮るもしらずねつゞけ。但しのせ物でもかこふたか。エ、ごくどうめらて有わいの。エ、鷹めが酔がさめたと思ふて。
よい口な事ぬかすはい。コリヤヤイこちらがねるには当が有。ナア権よ。ヲ、ソレ。われは知まい。頭かいふには。今
夜は大仕事か有程に。待て居いといはれたが。モウ来そふな物じやがと。見やる向ふへのつかく頭と見ゆる大男。田舎め
きたる侍と打連立て出来り。道一はいに立はたかり。（五十四ウ）コリヤく皆の者。云い付ケ置たもふけ筋。随分ぬかるな
合点かと。いふに三人ヤコレお頭。シテ其仕事の筋はどんな事でござんすぞいの。イヤ其子細云い聞さんと。頭巾を取ば松浦
軍蔵。是なるは平野官兵衛殿といふ身が傍輩。我々が主人はかゝみ山の分国大道寺学太郎様。其御主人を敵とねらふ唐橋作
十郎といふやつ。喝兒と改名し六十六部に身をやつし。上方を徘徊する由其喝兒をばらして仕廻ば。ほうびは我レ達が望に

任すと。いへは鳶がア、お氣遣なされますな。ぬかるこつちやござりませぬ。殊に御ほうびと有ば。ナア皆の者。ヲ、テヤ福徳の三年め。随分とがんばりましよ。ホ出かしたく。もし手に余らば此軍（五十五才）藏。飛道具にてたつた一打。其方共は此辺を心がけ。見付次第にしらすべし早行くと追立やり。

兩人跡を打見やり。官兵衛は差寄て。イヤ何軍藏殿。学太郎様の仰らるゝは。瀬左衛門を討たる事上聞に達し。室町殿より宝の詮義有ん時。館に有ては事の妨。後日の邪魔と某にお預けなされ。昼夜肌身を放さねば。此義において氣遣イはござらぬ。成程く左様でござる。只心かゝりは喝儿め。こいつを生け置ては夜がねられぬ。早速討取と有て某わざく参りました。いかにも我等迎も御主人の御意を受。此ことく盜賊と姿をやつすも喝儿めをばらさん為。ちと心当も有れば身共は枚方の宿を吟味せん。貴殿は橋本の辺を尋られよ。然らば後刻と兩人は（五十五才）左右へ別れ急き行。

跡に孫市小かげを出。ハテ合点の行ぬ。思はず此所へ来かゝつて様子を聞ば。御主人瀬左衛門様の弟子。喝儿と改名し諸国修行に出給ひ。此辺を徘徊なざると今の咄し。扱は兄御の敵を討給はん思し立。エ、忝い。何卒尋お目にかゝり。御勘当御赦免を願ひ。敵討の御供せば武士の本望此上なし。有がたや嬉しやと天にも上る心の喜び。併心へがたきは今の兩人。喝儿様を覗様子。一時も早ふ御目に懸。此事お知らせ申たいが何国を尋てよからふぞ。ヤマア何にもせよこふしては居られぬ。葛葉辺を尋て見んそふじや。くと足も空道を早めて急き行。茂り木や。山郭公鳴音さへ。血をはく思ひ紅梅姫。迷ふ恋路の旅衣（五十六才）きつ、なれにし我夫マを尋行を爰かしこ。したふも人の目せき笠傾く。日影枚方の。堤に暫し休らひ給ひ。

起上り互に。秘術をへ尽せしが。

折田は劍太刀に急所を切れ死物狂の働きに。軍蔵も持あつかい叶ハぬ赦せといつさんばしり。エ、残念やぜひもなや。喝

儿殿に尋逢。姫君を手渡し。宝の行なも俱々に詮（五十七ウ）義せんと思ひしに。何事も水の泡。申姫君様。私が打果な

ば誰かかはつて御介抱。御先途を見届ん。お名残惜やといふ声も次第く切果て。もろくも息はたへにけり。

尋入ル仏の御法夜ルの道。踏分歩ム五月闇。諸国修行の僧侶の旅。笈仏背負かねの音も。いとしんく物凄枚方。堤に差

か、れば。襟元ぞつと胸ナさはぎ。ハテ心得ずと気配り目配り。窺ふ足元躓く死がい。エ、むごたらしう切おつた。扱は

旅人の路用を宛に追剥共の所為ならん。非業に死スれば尽未来。うらむ期なしとの経説は不便の者の有様と。我を尋る人

ぞ共。しらぬが仏の名号を手向てこそは行過る。

向ふへつくく以前の非人。隠れど道に立ふさかり。ヤコレ修行者。（五十八才）報謝がほしい。く下あれと。いがみ

か、れど喝儿は。わざと詞を和らげて。人に物乞。各も此身も同シ修行の身。路用込はかつてなし。道をひらいて通され

よと。いへば鳶がそふはならぬ。我が体の其内に大事の物か有筈じや。夫レを仲間へ報謝にもらはふ。ア、イヤ一笈一鉢

の外込は何貯なき優婆塞に。望ム施行は。命がほしい。何が何と。ヲ、侍衆に頼まれ。とふから爰にはつて居た。喝儿

とやらいふ六部。爰へうせたは百年め。ぶち殺してほうびにする。皆合点かといふより早く右往左往に取巻は。心へ修杖

ではつしはし。手練の手並なき立れば。踏ちらしたる砂煙ふすばかりかへるごまの灰。ばつと一度に逃ちつたり。

従者に隙づいへ宿有方へ（五十八ウ）急がんと。笈をゆり上ゆうくとあゆむ膝口どつさりと。響く鉄炮火薬うんと計り

に倒伏。たおれ

仕済地色ウしたりと稲むらをぬつと出たる軍蔵が。傍り見廻しほくそづき。慥詞に手ごたへよい死ざま。喝ハル儿さへぶち殺せば若殿の

禍わざはいは。根をたつて葉を枯からす御ほうひは宝たからの山。イデ此通注進地色ウと飛とぶがごとくにかけり行。次第ハルフシに更ふくる。月影中キも。傾かたく運うんの

姫君ハルは。折田ウを尋爰中かしこ怪あやしや伏たる其姿。こはくながら立寄ウて。すかし窺うかがふ月明り。尽ハルせぬ夫婦が二世の縁。能々よくよく見

れば。ヤア喝詞儿様。我夫と。呼地土どこたへもあらざれば。詮方かたへに有合中す。水の溜を救い上口ハルに含ふんで抱だえこし。一滴てもう

るをす喝ハル儿が。息吹かへすを抱いたしめ。コレ申喝詞儿様。氣を慥詞に持もて下くださんせ紅梅姫でござんすと。呼地ハルはる声の

聞きへてや。苦キしき息をほつとつき。エ、たばかられしか口惜詞や。非人共と思ひの外。飛道具とびどうぐにてだまし打。扱とは敵の廻まわし者。

たとへ此俣ま死しる共。魂たましい此土どにとままつて。兄の敵我身の仇。儕せはらさでおこふかと。立地ハルんとすれと火薬くはやくの痛詮いたみ方なくも

見中へにけり。姫上は有あルにも有あラれぬ思おもひ。折角せつかく尋逢うながら此様にむごたらしう。何者ウかだまし討う。お前に別れ自は何と成なふ

ぞ悲ハルしやと取付すが縋すがり泣給フシふ心の内ぞいたはしき。

作地ハル十郎も尽せぬ涙。女ウの身にてはるくとしたひ給はる心ざし。嬉しいぞや忝中い。勿体ハルなくも御主人の。おゆるし受たる縁

なれば。死でもかはらぬ（五十九ウ）契ちぎりぞと。いへ共いた手の苦しみに又も哀あはれを。そへにけり。

非人地ウがしらせに平野官兵衛。大ハルたら横たへのさばり出。作詞十郎久しいな。平野官兵衛見忘れはせまいな。儕せレト人と思ひの

外ぬれ手で栗あはの紅梅姫。かういふ形なりて徘徊はいはいするも。儕せををばらせと主人の御意。軍蔵が鉄炮でくたばつたと。思ひの外の

死損い。トリや是从りやうりからおれが一料理。不便地ウながらと立ウかる。かよはき姫も一生懸命いっしょうけんめい。用意よういの懐剣拔放し。官兵衛目がけ

突かゝるを。引はづしてしつかと取。エ、ちよございなげんさいめ。学太郎様へ連でいて。土産にせんと思ふたが。喝儿めがくたばつたら。うぬも生きては居おるまい。逆もの事の世話次手。われ（六十才）から先へやつてやろと刃物もぎ取只一つき。むざんといふも愚也。

喝儿は身をあせり。かゝるうきめは天道も。神仏にも捨られしが。エ、能武運に尽果しと怒の涙血をそゝぎ落て流れて。枚方の堤も。染る計也。

ハ、ハ、ハ、ヲ、嘸御無念にござりやしよ。御尤でござりやすく。ハ、ハ、ハ、ヤイ喝儿。もふ諦め。譬体は自由でも某に手向ひならぬ。と云うはコ、ハ、是じや。瀬左衛門が預りおりし此一軸。手向ひなきは只一裂。但し手向ひして見るか。サア夫は。サ、ハ、けちぶといやつ。此ぎまで。念仏成と題目成と。うぬが勝手にこつき出せ。夫れからおらが御引導。未来の為のおがみ討。まっ此様にと抜刀。既に危き折（六十ウ）から。始終立聞孫市が憎き敵の荷担人めと。刃先に切付れば。コハ叶はじと逃行を。飛かゝつて大けさ切。

其伕立寄手拭に。疵口しつかと抱おこし。コ申。作十郎様。田代孫市でござります。作十郎様。お心慥に〜と。いふに喝儿力を得。危所へかけ付し不思議の対面悦ばしやとにじり寄て死骸の懷。取出す一軸押載き。エ、有がたし。此一軸手に入からは。兄が恨をはらはさんは瞬内。とはいへむざんの紅梅姫。我れ故かゝるはかなき最期。いたはしさよと悔泣。孫市も拳を握り。エ、今一足早くは。ナ斯御最期も有まじと先非をくいし。無念の涙。や、有て両手をつき。今日おまへ（六十一才）様マの様ヲ子を承はり。方々と尋しに。逢奉るも三世の縁。御主人瀬左衛門様。先き達て人手にかゝり御最期と。

聞より直様^{すだま}かけ付て御無念のはらさんと。思へどかひなき勘氣の身。あなたに逢しは拙者が仕合せ。何とぞ御勘氣御赦免^{しやめん}下され敵討の御供に召連られて下さらば。生々^{しやうしやう}世々の御厚恩と涙と共に願ふにぞ。実理^{はることは}りと喝^く兒も黙然^{もくねん}として居たりしが。兄上^{にい}の勘当。私には赦されねど。正しく一軸手に入しも。其方が働きなれば。一つの功も立たる道理。兄尊靈^{そんれい}に成かはり。勘当赦して敵討の。助太刀に召連ん。ハア、有がたし忝し。此上は片時も我住家へ御供し。(六十一ウ)疵養生^{きづやうじやう}が肝要と。姫君^{きみ}の御死^{みじ}がい。笈^うにうつし入しまいらせ。背にしつかと御手を取りさ、せ給へと。すゝむれど。二足三足たちくく。肩^うにしつかと助ヶ行忠と孝との道直に川浪。近き枚方の堤。伝^{つた}ひにへ剽行^{せうぎやう}

第八

住吉^{じよき}の岸^{がし}による波夜^なルさへや昼^{ひる}は。殊^{こと}さら参詣^{さんぎ}の足並。しげき鳥居前。弱柳^{じやくりゆう}成ぬ。並木^{なみき}の松。金花^{きんかう}の獵酒^{りやうしゆ}引かへて。汲^くで差出す。香^{かう}せんのはつと匂^{にお}し。髭^{ひげ}の香は爰^{こゝ}ら。名代^{なしろ}の茶店^{ちあんでん}かゝと、やせんべい竹馬^{たけうま}は。子供^{こども}愛相^{あいさう}の土産物^{みやげもの}。茶^ちわん片手^{ぺんて}に庄屋^{しやうや}権蔵^{こんざう}。ナントマア内義^{うちぎ}様。ゑらい参りでごんすのふ。ハイけふは卯の日の御神事故。おまへ方も定^{さだ}めて御参詣。アイやゝ。(六十二オ)こちとらは大事^{だいじ}の用。爰^{こゝ}らあたりに隠^{かく}レのない。鉄挺^{かねてい}伴七^{ばんしち}のいがみ者。牢舍^{らうや}を赦^{ゆる}す此所^{このところ}へけふ出ませいと。お代官様の云^いい付^けカ。あんな悪^{わる}いやつは。逆^{さか}もの事にもふ二三百年牢^{らう}に置て下さると。孫子の代迄。世話^{世話}がやけぬといふ様な。ナント理^り屈^{くつ}じや有まいかと。尤^{なほ}そふな庄や殿の咄^{はな}しも笑ひの折^{しや}からに。縄^な付^づ先^{さき}にあゆませて。所の代官堀口^{ほりぐち}曾平^{そうへい}。鳥居^{とり}のこなたに引すへさせ。其身^{そのみ}は床^{ふし}凡^ふに腰打^{こしうち}かけ。安立^{あんり}町の庄屋^{しやうや}年寄^{ねい}。出ませい早くにそりやお召と。庄屋^{しやうや}を先にどやゝと。土^{つち}辺^へに這^{はい}出^で畏^{かしこま}る。堀口^{ほりぐち}曾平^{そうへい}詞^しを正^{ただ}し。是^{こゝ}なる鉄挺^{かねてい}伴七^{ばんしち}。去年^{きょねん}九月十三日。堺^{さかい}乳^ち守^{もり}の廊^{ろう}において口論^{こうろん}致^{いた}し

剩へ。相手に手疵をおふせし（六十二ウ）科。入牢仰付る、所相手方疵平癒。去ルによつて命を助ケ。此所にて追放仰付らるゝ。有難ク存しませい。猶又来る廿八日。御当社神田の御田植。御神水をこめ置る、浅沢沼は。其むかし海中より顕はれし。万年功ふる緑毛の亀の背に。天平宝字の四字有。是を即年号とし。時の帝勅有て。亀は則浅沢に放ち給ふ。夫レより浅沢一町四面は禁断の場所と成。別ツして当年は旱魃なれば。神水の御用旁。番等きびしく申付きつと怠りなき様と。云付る事云渡し。縄をとかせて堀口曾平元ト来し道へ帰らるゝ。

跡打見やつて庄屋権蔵。何の事じや。アノ代官もよつ程のあほうじやはいの。われがいふ事計いふて。とんとおれに生うつしじやハゝゝゝ。ア、又（六十三オ）庄屋殿のひよこすかと。何をいはつしやるぞいの。イヤ何にも云ぬがコリヤ伴七。われマア一村のたばねもする此庄屋を。くらざいでまかした報ひ。何シと思ひ当つたか。イヤモ去年から段々と御苦労かけました。モウく行所じやごんせぬ。ヲ、夫レで思ひしれよ。イヤコレ皆の衆。伴七に道で髪月代。着物もきせかへ早ふ連ていんで下され。おれは又跡からいぬ。心得あるき組の者。伴七伴ひ行過る。

見送る庄屋が独言。ヤレく世話が又ふへたは。扱是からは浅沢の。番云付ざるまいと。つぶやく後へ。高砂や。此浦舟に帆を上げて月諸共に出汐の。付なやいく。一文とらして下されと。いふ顔つくく。ヤアわりや孫市が所の坊（六十三ウ）主じやないか。おまへは庄やのおち様かと。いふに恠り次左衛門。ナニお庄や様と逃出すを。ア、コレくくだんないく。思ひがけない此形は。ア、いとしやきつうこなたせつないの。其以前は扶持も取た神辺の何某。質の流れと人の行ふ。ア、哀はかなき有さまと。ほろりとこぼす一雫。次左衛門も涙を払ひ。面目もない御対面。いつぞやよりの眼病より。

芸道修行も叶ひませず。御大家より拝領の。時服巻物一つ売。二つの眼の良薬に貯尽。夫婦の者がさまぐと。なれぬ
手業の苦しみより。人參代と藥札に。貧の病イは次第に重る。あまり見る目のいちらしく。せめて二人が手助けと。(六十
四才) 覚へ込だる音曲も。昔は高家のお耳にふれ。御意に叶ひし舞うたひ。乞食非人同然の。身と成果し有さまを。推量有
と計にて。むせび入たる悔事。聞て庄屋も投首し。涙を鼻に紛らして。ヲ、尤じやく。併恥じる事はない。世のたとへ
にもいふ通り。泣ク子も目明といふからは。精出して泣たらば。泣親仁の目の明事も有ぞいの。爰に少々端錢。悔リがま
しい事なれど。だんなかはおまそかと。差出せば両手に受。コレハく忝い。御辞退申は却て不礼有がたふござりま
す。シタカ申お庄屋様。かうした形で出ます事他人へ元より娘にも。必共に御さたなし。そりやおれも合点力。在所の者の
目にか、れば。孫市が顔も立ぬ。(六十四才) サアく早ふ逝しやれ。然らばお別れ申ましよと。杖を力に立上り。孫よ手
を引。地を走。獸空をかける翅迄。子故には。涙の霞はれやらず。とほくとして立帰る。ア、コリヤく坊主よ。脇目
せずと手を引て行よ。ア、可愛やと。うつむく足元落たるは。鼻紙入と手に取上。コリヤコレ大方今のやつらが落した物。
テモ鹿相なと云つ、明て取出す文。エ何じや助さままいる御存よりとは畜生め。エ、此一包は佐々木の定紋四つ目の印。
ハ、ア長命丸とはテモマ好なやつ。コリヤ何じや。守宮の黒焼惣薬。コイツハとほうとてつもない物が手に入たわい。日
頃なびかぬ美婦人に。ちよひとふりかけしめるとは。うまいはくく。しめたはくく。(六十五才) アイヤくく。
とはいふ物の此薬。きくかきかぬか試してみたい物しやが。エ、コレマ誰ぞこよかし。ふりかけたやと見やる向ふへ。しや
なくとつまに。おくれし二つ髻しらを隠す黒油。年は五十に四つ五つ。六つかしそふな顔形チ。鳥居の方へとあゆみく

る。

是幸地ウいと権蔵が。行ハルちがひさまありと杓元へ。ちよいとふりかけそしらぬてい。様子いかにとうかへば。こなたの後家へ二足三足。折ウふし吹は恋風か。ぞつと身の毛も忽たちまちに。首筋元からジハくくぞくくく。まはる薬かふのふの機能に。いやな目付に顔打ながめ。ぐにやらくとしたひ寄ウキン。コレ権蔵様しらず顔は見忘詞れてか。わたしや宗右衛門が後家のらんでござんする。二世の夫に地ハル（六十五ウ）死別れ。夫地ハルしからかたふ後家立て。四十五の秋から。ア、ソレ六七八九五十二三ヲ、丸八年。九年地ハルサハリごしに男中もなく。それを自慢じやなけれ共。祝ウふとつたが目に付ぬか。腎薬ハルウも練薬ねりも鍼はりもあんまもらばこそ。命ハルにつないで適々たまに逢たこな様に惚色るとは。ヲヤ馬鹿らしいとふせふいな。惚ウか、つて居る此後家じや。コレ承知しやといふて下さんせ。エ、心カンわるやどふぞいなと。べつたりひつたりぬれかゝる。膝ハルキンにとつさりふご尻ノルは恋の。おもにといふらん。庄屋地色ハルも心はだくつけど。わざとすげなく突放色し。其志は嬉しいが。おれは定まるか、も有。又爰は往來人も見る。イヤもふおさらばと立地ウかゝる。後家ハルは驚き引とめエ、庄や。胴欲上（六十六オ）や情中なや。たとへ野の中道のはたどんな所も。苦中にせまい。かはゆふてく人の見るのも構中やせぬ。コレナ叶ナスハルへてくと放フシす気色は見へざりける。ヲ、其胸中けうちうを聞からは。何いなの否と云ふぞいの。カおのれはちつと用も有。そもじは新家の丸やへ往酒いざけでも呑シで待て居や。ヲ、そんなら先へ行程に。必違へて下さんすなど。庄や地ハルを尻目にひよくと。悦ウぶ足も地に付ず丸屋フシをさして急ぎ行。跡地ウに庄やが喜悦きえつの眉詞。サテ先首尾しゅびはよしト。今一所にいては余ンり手がな故。先へやつたは口舌くせつのこんたん。ハテ何地ウをがなとさぐる紙入ハル以前の文。ヲ詞ット有ぞく。マ助さままいるはさいて捨。扱いざずつといて座敷へ通り。ヲ、嘸待たで有ふのと

(六十六ウ) 声かける。ト後家めがツンと背けて居るは所で色男の氣取で。ホ何が氣に入ぬやらきついおもたせ。ドリヤお暇とトシくくくト出かけるは。時に後印めが。バタくくくくと飛かゝつて。胸づくしをト取て。コレお待。イヤ待しやんせ。そこへ行と待して置てもふ何時。どこに何して居やしやんした。イヤ何もしては居らぬが。ちつと用が。サ其用は何の用じやいひなはれ。イヤサ其用は。サア夫は。サア。くくくといふ拍子に此文がばつたり。ソレ其文あやしい見せなはれ。イヤコリヤ見せられぬ。イヤ見にやならぬと掴み付。イヤ見る。見せぬくくく。コリヤ放せ。イヤく放さぬくくく。捻合引合引やぶる。アイタゝゝ、コリヤつめるな。イタイハくくく。又かみ付。アイタくくく。こそぐるハゝゝゝ。(六十七オ) 吸付。引付。抱付。ハゝゝゝと口舌の段を一人して。早がはりやら作者やら。もてるくくと飛上り。踊つはねつ悦びは。仏の甘露にうるほひて。女性承知とかれしも。是にはいかで増るべき。

折から来ける下男。申く庄や様。後家様がお待なされてござりますと。半分聞てヲ、そこへ。くくくとの返事より。使を跡に氣は先へ。夢中に成て。かけり行。新家の方よりとつばかは。かざす扇の日かげさへ。七つと六つの時左海。泰庵が向ふより。留戻りに孫一か。夫レと見るより歩み寄。コレハく泰庵様。毎日く御苦労様と。挨拶すればこなたも立寄。ヲ、孫市殿。今そちへも見舞たが。扱御病人危いはい。立ながらも咄されまい。マアく(六十七ウ) 爰へと傍へに蹲踞。孫市辺りに心を付。先達てあなた様か。仰られし百段の血汐も九十九品迄調ひました。が今一色か。オ、ソリヤ調ひにくい筈。万年功ふる亀といふは此広い日本に浅沢へ放されし。緑毛より外にはない。スリヤアノ浅沢の亀が。サイノ鼻の先に有なから。其浅沢は禁断所。足踏すれば忽罪に行はるゝ国の掟。とはいへもしも天道の恵で。亀の生血が手に入事も有ふ

なら。夫^レをまじへる妙薬は。何時成共取にござれ。愚弄^{ぐろう}は病架^{びやうか}へ心もせけば。委^{くは}しい事は又明日。孫一^{地ハル}さらばとぞ、くさ坊主。病架^ウをさして急^フキ行。

孫一^{地ハル}はつくくと。左海^ウが咄^ウしの妙薬は。調^ウひがたき珍^{ちん}龜^{うはさ}の噂。いか、はせんと手を拱^うき（六十八オ）思案^{とほう}途方^ちに暮^中レ居たる。様子^ウとつくと聞すまし。後^ウへぬつと鉄梃^{ハル}伴七。孫市^{ハル}見るより。ヲ、コレハく中^{さいけ}在家^{ばん}の伴七殿。こな様子も何とやら。不時^じな様子を聞ましたが。無事で戻つて目出たふござる。段々^{おんぎ}恩義^{おんぎ}の有こなた。女夫^{おんぎ}の者が云^い出して。いかふ案^あじて居ましたと皆迄聞す。コリヤく孫市。其追^{つい}従^{しやう}は聞たふない。おれか牢^むへかまらぬ先に。わいら女夫^{かし}に貸^か付た十五両の。金か戻してほしい。どふやらこふやら助つても。一文なしの此伴七。サア今戻せ請取ふと。い^{地ハル}がみか、れば。サ、尤々^{さうぞくへん}早速返^い済したけれど。知ての通のおれが身代。忒^いもの事に今暫^いらく。アイヤワリや待まい物でもないが。いう何^{いつ}日には返すといふ慥な証文を書か。ソリヤ書ませふが爰に硯^いが。有共く。（六十八ウ）文言^{もんごん}に望^あか有案紙^{あんし}も認^{した}、持^めて来たと。懷^{地ウ}より取出す一通。腰^{ハル}の矢立に紙取揃^{まご}へ孫一^{まご}が前に差置^さは。手^ウに取て読内^{よみ}も。ふしぎそふにコレ伴七。先達^{しん}て借^かったは十五両。此案紙^しには五十両。殊に又十日を限^{かぎり}。返^{へん}済延引^{えんいん}するならば。女房鶴^{にようかく}を其方^{かた}へ。渡さふといふ此文言^{ぶんごん}。おりや此様な証文は。マア得せまいとむつと顔^{地ウ}。伴七^{ハル}はすり寄^よて。ハテ扱^と夫^へは悪い合点^{あて}。譬^{たと}何と書^かふ共。貸^かたおれか得心^{とくしん}で。十日の内に戻しやるなら。十五両で受取分。もし日限^{ひぎ}が過たなら。利に利をもつて五十両。内義^{うちぎ}の事も何もかもコレ本の表向^{へう}。追て書事^{しよじ}がいやならば。直に爰から代官所。殊に内には人にしらせぬ大事^{だいじ}の病人^{びやうじん}も有そふな。事によつたら盲^{めく}の親仁^{しん}。女房子^{にようぼうし}まで路頭^{ろとう}に（六十九オ）に立ねばならぬぞよ。思案^{しあん}して見^みい孫市と。よはみへ付^{やく}込厄病^{やくびやう}の。神様^{かみさま}がふと知れけり無念ながらも孫一^{ハル}は。お主^{おぬし}の

身の上しられては。尽せし忠義も水のあは。ぜひなき事と胸を極め。矢立の筆にさらくと。書認めてサア伴七。是でこなたの云分ないか。ヲ書判なれど我レが直キ筆。ム、是でよいくしつかりと請取たそんなら伴七ヲ、十日の内に必行ぞやと。詞つぶて孫市は。別れてこそは行跡に。

伴七は一念々。ハ、ハ、ハ、どふやらこふやら女房を。書入さした此証文。殊にあいつが最前からやぶ医めとの咄し合。お主といふはかの喝儿。亀は浅沢禁断所。こいつをか、つとに点。うまいくと尻引からけ。浅沢さしてへ走行。

往昔聖武天皇の御宇。海内より緑毛の靈龜（六十九ウ）を献ず。背に天平宝字の文字有を以時の年号と改。則龜は此地へ放ち給ひ。殺生禁制の高札立幾年。月を重ねけり。早日も暮て。人顔も見へぬを幸孫市は。顯かぶりに顔かくし走。付たる浅沢の。沼の辺りに息をつき。ハ、ア嬉しや忝や。禁断の場所ならては無妙薬と泰庵老の物語に。まんまと忍び来りしが。

いづくに有共分らねど。唐土の王祥は氷の魚を取得たる。其孝心には劣る共。我忠心を天道も憐有て緑毛の。龜を得させたび給へと。一心むがの合掌は。神も納受有ぬらん。

殺生界をいましめの。人を隔の杜若。ありと分ぬ五月闇。一夜のてらす数万の螢。沼の表も有くと見ゆるを心の当とにて。深みへこそは飛入たり。忠義一途の孫市が。漸得たる（七十オ）件の靈龜。サア仕おふせし有がたやと。天にも上る心地にてかけ行首筋引戻し。立ふさがりて鉄挺伴七。ヤア待孫市。禁断の場所へ這入し曲者。引く、つて手柄にする。覚悟ひろげと云せも立ず。大事を知たるうぬめから。仕廻てくれんと立かゝる。手練は得たれど無刀のあしらひ。こなたは無法のがむしや者組ところんず双方が。爰をせんど、争ふたり。

地ハル
かゝる所へ代官曾平。丑六か訴人によつて家来引連出来たり。上意く追取卷。声に驚くたるみを見て。ソレとかけ声家来も俱におり重つて孫市を。からめ取て引立れば。

地ハル
丑六はしやくり出。はつとを破りし大罪人。訴人したは此兩人御ほうび願イ奉ると。いふに代官出かしたく。ほうびは追て御沙汰有ん。先科人を引立よと。下知にゑつぼの伴七うし六。(七十ウ)羊のあゆみ孫市は引れ行こそへ是非もなき

第九

地ウキン
和泉路や。遠里に野は。名のみにて。今人里に立つぐ。安立町の其中に。分けて貧家の店さきに。へちま瓢筆ぶらくと。実商売は草の種。とうがらしの粉盛たるは。辛き世帯の印かや。

地中キン
世帯の味はまだしらぬ。岸野に姫松。高州や幾世がいそぐと。ノフお鶴さま。毎年五月の廿八日は住吉様の御田迎。乳守

の廓の女郎衆に。田植さすのを嘉例とは。物好きな神様ではないかいな。さればいな。私らが植付けた米でなければ上らぬとは。ほんに好た神様しやと。いへはお鶴はヲ、ソレく。此役を勤るは女郎の手柄。わたしも前方勤メたが嬉しい事でござ

んした。幾世さまは強き好嘸嬉しからふな。ヲ嬉しい所か常々は。気候に出ら(七十一オ)れぬ廓の内。此早乙女を勤るので。適々外を見るのでな。モ気かはれてとうさをお忘れたはいな。ホンニ其忘れた次手。あすのはれにと精出した田植の

惣ざらへ見て下さんせと立上り。かりに扇の筭を。早苗かわりと植付の。拍子も揃ふ田植哥。爰は津の国。ヤンレ住吉の。神の御田を植ふなら。天津御空はヤンレ長かれよ。地も又久しと寿て。所繁盛と栄へはびこる神の御田を植ふよ。

ヲ、けふとうよ揃ふた。請合できつと当るはいな。当るとはヲ、嬉しと。心うきうかれ女が。三人寄ればかましい。

折地色ウに来ける左海泰庵。おつる見るより。コレハく御苦勞様。病人もお待申て居られますれば。あれへお通り下さりませ。
左様ならばゆるさつしやれと泰庵地ウは。病架ハルへ通れば姫松色が。ヲ、わたしらとした事が。御病人が有そふなに。やかましうござん（七十一ウ）せふ。サア皆様是から神事しんじの始る迄神主様かぬしで待合さふ。お鶴さまいてこふ。ヲ、又あす戻りにお寄。おさ
らばと打連ツてこそ出て行。

泰庵地色ウ奥より屈託くつたく顔。コレ内義こまつた物じや。始メからいふ通り。つうれいの葉ではき、めはない。とかく頼はかの一味の
妙薬。其一品が調とはいでは所詮しよせん助らぬ奥の病人。殊に大望たいぼう有お人と聞て。とふぞしてと思へ共。せふ事がない。随分と氣
を付たがよいぞや。お暇申と泰庵地ウが出るを俱に女房が。門送りする向ふより。名さへ鉄挺ウ伴七迎。所ハルで名うてのいがみ者。
女フシの好ぬ形顔ウ。コレお鶴詞。ア、いつ見てもく美しい者じやな。此様な女房持ながら。不了れうけん簡な男でござるはい。何と物
は相談。云へぬ事は分らんが。此様うそきたない。むさくろしい。不自由なくらしせふよりは。此伴七様の奥様に成と。
第一金が沢山たくさん（七十二オ）で。思物は何でも望次第。ヨシは承知ぞちか。男がよい迎喰くる物ではない。程に。ノヨシカ承知か。
承知して相談してみる氣はないか。どふじや。承知か。くと。しなだれか、れば。お鶴地ハルはむつと突退色て。伴七詞様。わたし
や金には惚ませぬ。好た男と暮すのが。楽しみでござんする。又してもく女房になれの何の迎。あたしつこい。廊に居た
時とは違イます。孫一殿といふ男の有身。重ねていふて下さんすなど。あいそ内義の腹立顔地ハル。伴七ウははくそづき。コレお鶴詞。
何ほ其様にひこしやことしやつても。孫一と相對で借してやつた五十両。日数十日限に戻さねば。そなたはおれが女房にす
る約束。エ、何と云ハしやんす。大まい五十両という金。こちの人はいつからしやんしたへ。ヲ、貸したといふは此証文。

金子五十両也。日数十日を限返済致すべく候。もし延引(七十二ウ)致し候は、女房お鶴を遣はすべし。との此文言。コリヤコレ孫一が手じや。何と覺エが有ふがと。差出せば押開キ。見れば覺の夫の手跡。ハタはつと計に当惑の。何と返事もないじやぐり。ナントようした物で有ふがの。又此金を戻すまいといふがさいご。孫一がかゝもふて居る。兄を討タれた腰拔。引ずつていてほうびの金。コリヤ驚くな。伴七は見通し。何もかもよふ知て居なさるよ。夫レがいやなら五十両。コレお鶴どふじやぐ。女房に成てたもるか。但し腰拔を引出そか。サアぐ。どふじやぐと。せめ付られ。思案しかくの金事は。俣ならぬこそぜひもなき。

折から表へ所の庄屋。氣の毒顔に内に入。コレお内義。禁断の場所へ這入た科で孫市が牢舎。どふで命も有まいが。せめて金の五十両(七十三オ)も有ば。首代でも願ふて見よ。なれ共。何をいふても埒明ぬ。が、うは云フ物の。親仁殿共相談しや。所の名物瓢箪から。金が出まい物でもないといふはのしほ。首かたふけ帰りける。跡見送つて女房は。こりやまあとふしてよからふと案じに。胸も落付ず。余所の歎きを考へてた、りに廻る神様かぶ。鬼門の丑六象身の万八時分はよしと門口から。伴七爰にいやるか。おいらが兼て頼まれて居る。大金に成代物。爰らあたりに埋んて有様子。サ、無代物も大方まふと奥の方。尻目にかける伴七か。三人寄ば文殊でも。及ばぬ智慧の悪者仲間。象身はお鶴が鼻の先。ヤコレおかみ様。爰の孫市も。禁断所へ這入た科で。むし(七十三ウ)にかまり難義でこんしよ。やほんに鉄挺よ。きのふも。代官所へいたれば。孫一がござれて居る最中。ホンニく目当て見られる物じやないわいと。いふに伴七ヲ、そふで有。ソシテマア何貫で有たぞい。ヲ、しかも天秤。ハア其天秤責。ついに見た事がない。どふいふ責じや咄して聞しや。ヨアノわれが天秤しら

ぬとは。コイツハ大笑ひじや。知らずは咄して聞さふ。相人あいてが入。コリヤ鬼門よ。われちよつと孫市に成て呉。ア、イヤ／＼気味の悪い。赦してくれ。否いやじや／＼も聞中ばこそ。有合細引幸と。鬼門ウをかりの科人に。帯ウから通してそつとしめ。縄先鴨居ハルカモへ打こして。コリヤ鉄梃。此細引を持て居て。おれが口上に合して引上い。合点か。ヲ、合点じや／＼。コレおかみ様／＼。おまへの殿御とのご（七十四オ）のお姿は。マアこんな物じや。東西／＼。扱お目通りにしぱり置ましたるは。此度始とめての科人。孫一が像かたちでござりますじり／＼と引上ますれば。五体のおもみ繩のしまり。次第／＼に苦しみする体。所々は口上を持まして申上ます。こなたの縄を引ますが。発端でござります。サテ／＼／＼中程に至いたつてはあちらへぶらり。こちらへぶらり。／＼とはねます。此義名付て水汲みづくみの。釣瓶つるべの形でござります。サテ／＼／＼。サレサテ。コレハイサテ。トツコイサテ。おつとそこらでとまるのが。お寺の堂だうに釣つて有。鉄燈籠かなとうろうでござります。サテ／＼／＼頂上てうじやうへ／＼と引上しめますれば。あんまり苦しみ目口から。流るゝ所は龍門の。血は瀧津瀬たきつせでござります。東西しめび此義も首尾よく相勤（七十四ウ）ますれば。先々様は入かはり。先こなたへ逆落さかおちし。コリヤ／＼御ほうびに一番誉たりハ、／＼。閑度々かんたびくに女房が。胸上も張さくうき思フシひ顔を。背ハルけて泣計。伴七ばんしちも打しほれ。ア、扱詞も／＼いぢらしい咄を聞て。思はずしらず涙がこぼれる。コレお鶴。悲しいは道理／＼。男は当つて碎つぶけ。悪つよクに強いは善にもつよい。おれも向後けうこう心を入かへ。本心に立返る。かした金も入ぬ。わがみの事も思ひ切。孫一を助てやる。是必かならず氣をもんで癩しかくおこしてたもんなやと真実見地ハルへし。涙声中フシ。エ、何と云ハしやんす。孫市殿を助けてやる。ソリヤマア本でござんすか。ヲ、本共／＼。其助きすけケるといふは此証文。是へ親仁はんの判をして。そなたの身を売。其金で孫市を助る。コリヤ世間せけんに何ぼも有事じや。（七

十五才）夫の爲お主の爲。外でもない元の乳守。高で一年半の辛抱じや。どふぞ孫市を助けてたも。ほんにやれ／＼今の咄しを聞ては。他人のわしさへ。ほんに身も世もあられぬと。いふに遣は女氣のだまさるゝとは露しらず。何の思案も有ばこそ。あたふた明る張箱の。判取出し手に渡し。コレ伴七様。段々のお世は。死でも忘れは置ませぬ。一時も早ふ孫一殿が助ケたい。と、様へ知ラせては隙が入。金もおまへが請取て。早ふ助けて下さんせ。皆様も俱々にと。涙かくして手を合せ。頼むあいその笑顔にはいかな鬼でも鉄棒を取落すべき風情也。

伴七印形取認。一時も早ふ戻してやらふ。必頼みまするぞへ。ヲ、合点じや／＼。象も鬼門もサアこいと。（七十五ウ）

三人打連門に出。二人ながら大義。まんまと首尾よふ。コリヤ。親方に金請取。祝ひ事に吞かけふサアこい。／＼と三人は伴ひへてこそ出て行。

世を悔み身のうき忍ぶあみ笠に。昔は神辺何某と脇の見る目も恥しく孫を。ツレ共シテ柱。並木の松を橋がゝり。切幕ならぬ破暖簾。とほ／＼帰る門の口。夫とみるより。ヲ、と、様戻らしやんしたか。嘸草臥でござんせふ。伊之介もしんどかろ。イエ。わしはしんどい事はない。よふあるくといふて。祖父様に是を買て貰ふたと。見せれば手に取。ヲ、こりや持遊びの土の塔。と、様もあまやかした此様な物持て遊ぶ年かいナ。イヤ／＼余所の子と違ふて。中々おとなしい坊主めと。孫（七十六才）にはいとゞ目のない祖父。帰られしかと一間の障子。開く武運は尽果て行歩。叶はぬ喝儿が。病勞れたる其有様。次左衛門手をつかへ。今日は御病氣御平愈の願こめに。大寺から万代の八幡へ参詣を仕り。只今下向致しました。是は／＼老足といひ殊に眼病見る影もない某を。聲の縁辻親子共。様々の心遣ひ。過分至極と計にて打しほるれば。是は又

改つたお礼。賀孫市が三代相恩の御主人。スリヤ私共か為にも。大事のくお主様。御家来の我々へ御遠慮は御無用く。
ヲ、ソレく、と、様の云へしやんす通り。お心遣いは御病気の障。殊に大望有お身なれば。心で心の御養生が肝心と。お主
思ひも夫思ふ。御心（七十六ウ）ぞしほらしい。ヲ、実誠。俱に矢の戴ざる兄の敵。大望有身を持て。小事に屈するは
匹夫の勇。コリやく伊之介。此中聞た阿漕の謠。夫レを心の鬱散と。望嬉しく母の親。祖父も俱々コリヤ伊之介。旦那
様が謡聞ふと御意なさるゝ。コレくほん随分味よふうたふてたも。アイと行義に畏。廻らぬ舌もいたいに。さなき
だにいせおの海士の罪深き。身をくるしみの海の面。一文取して下さりませ。といふに驚次左衛門。そりや何いふぞ不行義
など。あせるはづみに袂より悲しや落たる米袋。お鶴は見るより。ア、コレ爺様。お前の袂から。米袋が落た。ア、イ
ヤソリヤ大寺の仏餉米。買つてくれとの見せ米なれど。ヤモ（七十七オ）米は買はいでも沢山。われも知って居る通り。わし
が乱舞の弟子衆から。新米でも古米でも望次第。ヤ申。喝儿様にもお心置なく御養生ソレ孫よ旦那様を奥へ連まし猿が嶋の
敵討咄して御機嫌取ませいが今の様な座興を必云まいぞ。アイと返事も愛らしく奥へ伴ふ御主人を。大事と思ふ稚氣は追
に武士の胤ぞかし。

跡にはつきほ次左衛門。娘が傍へ膝すり寄。訳のない子供心にさへ。お主大事と思ふ物。ましてや賀殿忠義一途にこりかた
まり。此度の入牢も。御病気の妙薬を。取得ん為の憂難義。夫レを隠して。紀州辺へ用事有て参りしと。云いくろめては置
物の。もしや死罪に極まらばわれから先へ死ヌで有。若き（七十七ウ）を先立どふせふぞ。もし二親に離れたら孫めは何と
成物ぞ。夫が悲しいくとわつと泣たい。親と子が心を奥の間より。お鶴くと病人の。呼声はつと気を取直し涙隠して。

入にける。

歎きの中チにつくぐと思ひ。廻らす一思案。孫よ。くと呼出し。コリやよふ聞よ。日頃われは物覚がよふて。むつかしい謡でも。二三辺で覚る利口者。今わしがおしへる事を能覚て。代官様の前でいふとな。強い者じや賢いと人が誉る。

第一と、は戻るし又か、も悦ぶ程に。よふ覚ていふてくれヨ。アイと、様が戻らしやる事なら。よふ覚ていふ程に其代賃に。今度は土の地蔵様買て下されやと仏ほしがる稚子は。可愛や虫が知すかと。(七十八才)思へば胸迄突かゝる。涙を吞込ぐで。ヲ、そんならよふ覚よ。かうじや。恐しながら申上候。サアいふて見い。アイ恐ながら申上候。先達て浅沢沼

へ忍び入候者は。く。私にて候間。親孫市を命を助け。く。私をいか様共御成敗仰付られ下さるべく候。く。御代

官様伊之介。く。ヲ、出かした。くくナア。是程利口な初孫を。祖父が手づから連ていて。何と代にやられふぞ。

可愛の者やと抱しめ泣入。く泣沈む。

合点行ねは伊之介は。祖父様何で泣しやると。うろくするに祖父は捨。きへ入思ひを喰しぱり。ヲ、そふじや。く。小の虫を殺し大事のく聲の命。幼少成る者の孝心。お聞届有そな物。遅なはりては詮もなし。(七十八才)道で。今一度教ふと立上れ共。よろく。杖は爰にと伊之介が手に持添ユるを力草。代官所へと急キ行。

跡へいきせき乳守の親方。親仁内に居らるゝかと。声にお鶴が一問を出。ヲ、コレハく親方様。久しうお目にかゝりませぬ。マア一ツふくと煙草盆。吸付出すは廓のくせ。子持と見へぬ品形チ。扱お鶴。委細の訳は伴七殿に聞たが。何やら金の

入筋で。か、へてくれと段々の頼。外でもないそなたの事。下地がこちの奉公人。四の五のなしに一年半を五十両。伴七

殿へ金渡し証文も請取た。サア連て逝ふ用意しや。と粹に似合ぬふぎどふは。皆親方のならひかや。

覺悟しながら今更に。さがる胸を押しづめ。(七十九才)暫しが内あの納戸で待て居て下さんせ。其間にと、様や。伊之介

にも暇乞。ヲツト合点。イヤモどの奉公人でも立際に。さつぱりするは一人もない。子供に灸する様にいちむぢいふがお

定り。幸けふは新家の丸屋で住吉講。是からいて戻りに寄。念シの爲じや去状も書して置や。ドリヤいてこふと才兵衛は。

新家をさして出て行。跡に。しよんぼり羽拔鳥。お鶴は重る物思ひ。かゝる難義に大寺の。無常を告る入相の。かね故又も

しづむ身は。生死のさかい夫故と心危や角行灯に。ともす光りも幽なる。有かなき身の孫市が。漸戻る我家の軒。お

鶴。くといふ声は。慥(七十九才)夫と走寄見るより恟り。ヲ、やつぱり主しや孫市様。よふまあ戻つて下さんした。

サアく内へと手を取て伴ひ入間も氣はいそく。夢ではないか現かとそゝろに悦ぶ妻の顔。見るに満くる涙を隠し。ヲ、

嬉しいは道理く。ヤモ中々厳しいお上の掟。所詮助らぬ我命と覺悟極メて居た所。庄屋殿の云なしと代官様のお情で。

思はず命助りしと。聞に飛立嬉しさは。三千本の優曇花を鉢に生ケたる心地せり。ヲ、私とした事が余りの嬉しさに飯上る

のを忘れて居た。嘸ひもしうござんしよ。戻らしやんす知せやら。けふは坊が誕生日。けさ拵へた鯨餅。何はなく共赤の飯。

祝ふて上れとかい立て。取出す膳も蝶脚の外は禿ても(八十才)打明て。いはぬ辛勞。黒塗のお櫃取添持て出。サ、目出た

いく此膳に。焼物のないは氣が、り。幸の虫の塔夫の前に押直し。お前も覺てござんせふ。私が勘を引時に。別れの膳の

焼物は。膳をすへるが乳守の掟。夫でけふは改て。此焼物をすへますと。いふに夫はふしん顔コレお鶴。何やら訳の有そ

ふなそなたの詞。サイナ。別れの膳といふ事いなア。ム、別れの膳といやるのは。ソリヤマア誰に。アイお前に。ヤア。サ

様子は跡で知しませふ。去状書て下さんせ。と聞て弥ふしんはれず。夫には何ぞ様子が有。子細聞ねばいつ迄も。暇やらぬは男のこうけ。サアく様子は子細はと。とはれて涙の顔を上。様子といふたら伴七にか、しやんした金の催促。利に利をかけし五十両。(八十ウ)戻さねば私をは。女房にするいやならば。喝儿様を訴人するとの。過引ならぬ手詰の難義。打てかへてのお前の為。夫れ故私は身を売て。元の乳守へ行まする。と聞て夫は詞さへ。胸にせまつてはらく涙。忠義といふ事ないならば譬親子四人連。手を引合て出る泣も。何の別れふ隙やろふぞ。只何事も約束事。はかない此身と堪忍して。こらへてくれよ女房と手を合すれば。ア、勿体ないくく。まだ此上に艱難。命のせとに成泣も。夫トの為にはいとひはせぬ。二世といふ字に馴初て。殿様といふては一生に。おまへならでと。思ひ詰。心で済す住吉の。おもとの宮は頼込の願ひ。叶ふて漸くと身俣に成た。嬉しさに。つらい世帯も(八十一オ)苦にならず二人が中の伊之介が。成人するを楽しみに。思ふて暮すかひもなく。二度の勤は情ない。仕様もやうもない事かと夫トの膝に。すがり付声を。忍びのくどき泣。漸に涙をとめ。ア、歎に限のない物じや。もしもおまへが死しやんせふは。私も生てはおりませぬ。ア、夫を思へばわしや嬉しい。いそぐいさんで行まする。したが申こちの人。伊之介が虫のおこらぬ様。邪魔で有と朝夕に。丸薬吞して下さんせ。又目の不自由な年寄や。子供か、へてお前の難義。あたふたとして。必。煩ふて下さんすな。毛纔な内の勤奉公。夫れ迄の暇の状。ちよつと書て下さんせと。いふにぜひなくかけ硯。引出し明(八十一ウ)て。取出す。神も結ばぬゑにしかとこぼす。涙の水入て流れの。苦勞する妻と。思へばいと。力なき筆の。命毛切果る。妻は貞女の鏡立。誰に見せふ泣筭の。鬚めほどいてかつ山に。結びがひなき此身やと顔を背ける。忍び泣。

親地ハルの。心を中はしらず。か、様戻ハルったくと。内地ハルへ這入はお鶴色は恂詞り。ヤア伊之介。わがみはマア寝て居やるかと思ふたにめつそうな。日の暮て有にどこへいきやつた。アイ。わしは祖父ぢい様と連立て。殿様の所へと。御呼にいたけれど。マア先へ逝いね。と、様は跡から帰してやると。庄やのおぢ様ハルが。あそこ迄連て来て下さつた。か、様わしはねぶたいわいの。寝地ハルさしてほしいと抱付。ヲ、ねふたかろく。ガコレ伊之助八十才。と、様へ戻つてじや嬉しいかと。いふに欠寄色ヤアと、様。逢ウたかつたと取すがる。父も其俣抱色キ上。イヤノウ女房共。喝ハル儿様にもお目にかゝろが。おれも大きに草臥くたひれた。坊主はおれがねさしてやると。納戸地ウへ這入後フシかげ。見送る目さへ泣はれて。迎ウの駕の今の間に。行ウねばならぬ私が身の上。是ウが別れでござんすと。其俣そこにとどふと伏身スエテもうく計。泣居中たる。

孫故に塙表ハルに迷ふ目なし鳥。戻ナラスウるも老の。足フシカ、リ中よは車廻る。因果といひながら。立帰ウつて髻や子に。何と語り明中さんと。案ウじはちぎに。踏ど途さへ躓ハル敷居にお鶴ははつと。どこもお怪けが我はないかいなと。いたはり起し内色に入。マア悦詞ばします（八十ニウ）事が有。孫市殿が戻られました。早ふ逢て下さんせ。ヲ、成程。孫市は戻る筈じやく。其戻つたに付て云ハねば成ぬ事が有。必恂しり仕しやんなや。其髻を助ふ為可愛や孫は死だはやい。エ、つんともふ何を云ハしやんすやら。と、様お前はマア氣が上りはせんかへ。ヲ、合点が行まい尤もじやく。我レにしたら大抵ていでは得心とくしんせまいと。孫めにとつくり云い聞せ。庄や殿を頼んで命乞。孫を代に立たればこそ髻殿が戻られた。死罪しざい極マる科人を。何の其俣返さふぞと。いふて泣出す爺親てより。娘ウは一ッ向合点かう行ず。コレと、様。もそつと先伊之介は戻つて来て。孫市殿と一所に。奥に寝て居ますはい（八十三才）なア。ヤア何じや孫は戻つて居る。南無あみたくと。ア扱ハルは子心にも親を慕したひ。さいの河原を遙々と。迷ウ

ふて来たか可愛やと。いふにお鶴は。ヤアくく。そりやマア本の事かいなと立上るを引とゞめ。コリヤ娘。親子は一世の縁と聞。死だといふ事知てから。我レか逢フたら消おらふ。ちつとの間なと置いてやりたい。顔の見たいはわれよりもおれも逢いたいくくと押へと、むる表の方。庄屋を先に所のあるき。死がい戸板に乗て駈込。コレく親父殿。孫を身代にと頼まれたか。過料身代で済ムは常の科人。禁断所と知て這入た大罪人。親類へ祟のながお慈悲じやと。可愛やちとの居る前で成故に合ました。死がいを(八十三ウ)慥に渡せと有。代官様の仰じやと。いふたけの事云渡し。歎きを見まいと足早に。打連立て帰りける。

お鶴は其俣かけ寄て。見ればあへなき夫の死骸。親子は夢の心地にて一間へかけ入尋れど。有共見へす幻の影にもあらぬ蜉蝣や姿は。きへて見へざれば。喝兒は膝行出孫市は相果しか。残念至極と氣をいらち。五臓もみ切無念の涙。伊之介も走出。と、様か居やしやれぬ。と、様呼て下されい。と、様のふと欠廻り。死がいを見るより縋り付。ヤアコリヤと、様は誰切ッた。誰が殺した是と、様。物いふて下されと足摺したるいぢらしき女房はいつそ狂氣のごとく。扱は忠義にかたまりし魂魄で有たかい。跡に(八十四オ)残つて是がまあ何と生て居れふぞ。一所に死たいくくと死かいに取付母親に。又取縋る伊之介も俱に亡骸押うごかし。わつと泣入心根を思ひやつたる祖父喝兒。心余りて四人が。歎く涙は五月雨に。水倍増て浅沢におしや盛りの。杜若水に溺ることく也。

かゝる歎きの其中へ駕をつらせて鳥や才兵衛。ヤコレくお鶴。用意がよくば早ふおじや。サアく早ふと引立る。こりや何故と驚く祖父。ヲ、と、様合点か行まい。孫市殿が伴七に借しやんした。其金故に二度の勤。夫の役には立ね共。行ねば

お主の身の上。カ目の不自由なお前に此子。二世の夫に死別れ。何と是が行れふ（八十四ウ）ぞいなア。か、様余所へ行しやるなら。わしも一所に連れて往て下され。無理もいふまい云事。聞ふか、様なふと慕ふ子を。祖父は這寄縋り付。扱もく世の中に。親に放る、子も多いが。此様に又むごらしい。因果な事の数々が続く物かいのと。かぞへ立たるくどき言。老の。涙ぞ果しなき才兵衛も持余し。コレ駕の衆。さつきにもいふ通り。涙もらふていかぬ商売。少むごいめ見にや成ラぬ心得太郎兵衛相棒庄六すがるを払ふ玉箒。無理に押込籠の鳥泣音こがる、雛鳥に。別れ行身は地獄の呵責。閻魔や牛頭守頭が駕に哀を乗て行。

引違ふて左海泰庵。息もすたくいさみ声。サ、目出（八十五オ）たいく御病人。たつた今孫市殿彼亀の生キ血を持て来て。尊公の身の上迄。残らす聞た忠義の次第。一時も早く調合の此薬。吞で本復あれよと。茶碗に移し差出す。

扱こそ是も靈魂の。賜物共と押載。家来も多き其中に勘当受し其方が。身を捨ての忠義心。本望達ッせし其上はそちが石碑を建立し。跡念頃に営まんと詞は今に荒陵山。四天王寺の西門に扇の石碑と著き。コハ有がたしと次左衛門。我は是より出家を遂。智が菩提を弔はんと。迷ひの雲は払へ共。只晴レ間なき五月闇。暗き眼病の便りなく後れ。晩稻や枯る身の。亡孫市が種残す。孫は早苗よ（八十五ウ）水の世話。せめては舞行秋の。田面を老の楽しみと。抱上ても見へぬ目に。涙はらく落し水。

始終の様子を窺ふ悪者。中にも伴七踊り出。コリやく喝儿其方か本名唐橋作十郎と知たる故。学太郎様の兼ての頼生捕てほうびにする。覚悟しはれと左右より。捕たとかゝるを身をかはし。死霊の力討添て腰背ばんく踏飛す。早明方を告る鶏。

東天紅のこへに連^ウ。病氣平愈^{病ハル平いゆ}なすからは。一時も早く打立んどつこいそふはと丑六万八。三人手玉に荒家の納戸くだけて住吉の。田植の景色見へ渡る。ハア誠に明れば五月廿八日。曾我兄弟が年来の敵を討し月も日も。けふ門ト出の最上吉日。ハハハハ悦ハしや（八十六オ）と勇ミ立。追討敵に廻り逢。本望達ッして高天に名を翻す会稽や。多賀の誉と筆跡に残る。武名そへいざさよさ^{三重}

第十

小人閑居して不善をなすと。古人の言宜成かな。爰にか、み山早枝家の分国。大道寺美作ノ守が居城の構。花壇築山草木迄。美麗を尽す殿造。剩へ嫡子学太郎栄花にほこり。姪酒乱防狼藉は類ひ。稀成行跡也。奥御殿には若殿の。所労を慰催ふしの。能も三番羽衣の。袖打かへす天乙女囃。地謡一様に。柳の腰や袖すりの。松の位の。一トかなで。心空なる気色かな。奥の囃子のもれてくる。謡は簾の切戸口。源太か背に指かさす。梅花にあらぬ古葛籠。背負て（八十六ウ）のかく定平が。入来る折から松浦軍蔵。出合頭に顔と顔。ヤアうぬは定平。合点行ぬは其葛籠。ソレ家来共引おろせと。下知に随ひ双方より。かゝるをはり退はつ飛し。庭上につつ立たり。イヤナニ軍蔵様。御推量の通り下郎めは。早枝の家来定平と申素奴。聊の誤り有て扶持に放れ。御縁家の此お屋しきへ御奉公が申たさ。態く参つた此奴め。何科有て此狼藉。ヤアぬかすまい誠奉公が望ならば違背に及ばぬ其葛籠。身が目通りで開いてみよ。アイヤソリヤ成ませぬ。半季溜りの奴が葛籠は。お大名の城廓同然。見せぬは曲者軍蔵が。直きに詮義と立かゝるを。一間の内より声高く。ヤレ待軍蔵早まるなど。奴引連賤機御前。しづくと立出（八十七オ）たまひ。始終の様子はあれにて聞。御本家の家来と有ば。鹿略はあらじ詮

義には及ぶまい。此方の家を望奉公が仕たいとの事なれば。御本家へお尋か。お暇の出た其様子。とくと聞^{たし}糺^{たし}した上。品によつたら召^{かゝ}抱^よふと。詞^{地ハル}に差出^色る松浦軍蔵。イヤサア夫ではお家の為。あなた様には何事も御存しない故。采女之介殿の家来なれば。若殿様の。イヤサよしもあしきも自が心に有。新参の其方が差^{さしづ}図^づは受ぬ推参者扣^すへて居よと。矢御意。返^{地ハル}す詞も長刀ナ柄^{フシ}をひねつて扣^{フシ}へ居る。

折^{地ハル}しも番士^{ばんし}の声として。御上使^ウと呼^{フシ}はるにぞ。ハテ思ひがけなき上使のの御入とや。カ何はとも有自は此様子。美作殿へおしらせ申さん。イヤナニ軍蔵は御上使を。御饗^{もてなし}応^{おこ}の用意せよ。コリヤ定平（八十七ウ）とやらんは部屋へ往て。休^{きう}足^{そく}しやと云捨^{地ハル}一間へ入給へは。二人は心奥^ウと口別^{フクリ}てへこそは入にける。

早御上使の御入と玄関^{地ハル}広間^中ひしめけば。衣服^ウ改^め美作^み親子^{はる}。賤機^ウ諸共打連て儲^もの。席に出迎へは。程^ウなく入来る赤松民部之助藤忠。長^ウ上下^さ爽^{はやか}に。畳^さは^はりも故実^{はる}を正し。悠々^{ゆうく}と座^しに着^はば。美作^{地ハル}は両手^色をつき。御上使^詞御苦^み勞^{きん}千万。盼^い学^{さつ}太郎所勞によつて引こもり。無礼の略衣^つ幾重にも御赦免^つ有て上使の趣。具^つに仰下^さるへしと慇懃^{みんきん}に相^の述^ぶれば。民部^{地ハル}之助^い異^さ義^{さつ}繕^くひ。

上使の趣余の義に有す。今度足利義満公。主上^{しゆ}御幸^{みゆき}の儲^もの爲。洛西に金閣を造榮有諸国の重器を召る、所。多賀早枝の太守より献^{けん}ずべき三品の御宝。紛失^{ふん}せしと上聞^{じやう}に（八十八オ）達^{たつ}し以ての外の御怒^いり。則^{もつ}チ所領^{しやう}没収^{もくしゆ}有べき筈なれ共。先祖の武功^{ぶくう}。老臣^{らうしん}の忠勤^{しゆきん}に免^{めん}ぜられ。縁家たる当家より宝の行^{ぎやう}を詮義^{せんぎ}して。差上^さらる、者ならば子息たる学太郎へ。早枝家の督^{とく}相統^{さうとく}。並^なびに領国^{りやうこく}安堵^{あんと}の御教書^{みけいしよ}下し給はるへしと有かたき詫意^{わい}の趣。早速^{さつそく}に上京^{じやうきやう}し御受^{みう}有て然るべしと事^{こと}こまやかに。演^{えん}説^{せつ}有。

学太郎ハツト頭を下。コハ忝はづかき御見出し。多賀の家門も多き中。某へ相続とは先祖の誉身ほまれの面目。此上の有べきか。ナニ母
 人様にも。御悦うび下されい。ヲ、夫それ。優曇花うどんげ増りの君の御上意。ちつ共早ふ上京の。用意直様仕らん。出立いとせき立
 ど。騒さわがぬ美作みさくヤレ待駢まち。某そのか詞も待まちず龜忽きこつの振舞ふるまい扣くへ（八十八ウ）よと。不興ふけうの牀に賤機御前。イヤ申我夫マ。ケ程目出
 度我子の出世。門ト出とゝむる御所存はと云いハせの果すヤア何を女の小ざかしい。紛学まな太郎が不行跡ぎやうせき。殺生好ムのみならず。
 や、もすれは不骨乱妨ふこんらんぼう。必其身かならずに過あやまちあらん。何卒他行をとゞめんと。乱舞らんぶを赦すも親の慈悲じひ。其上今の上使の趣。三品の
 宝を詮義して差上よとの上意ならずや。早枝家の忠臣義士。心を尽し身を碎くだき尋て知れぬ宝の有所。中々たやすく輒く汝等か手に
 入へきか。白痴たわけ者と一句に詰はられ親子共。詞うなければ民部之助。ア、イヤ其義はちつ共氣遣きぢイ有な。宝詮義の其中は。譬たとへ
 半月げつツ一月いちげつの延の引有共某か此地に逗留たうりう仕り。一品成共御子息より。差上らる、物ならば。武将の御前（八十九オ）は藤忠
 か宜しく吹拳すいきき仕らん。心易こころやすかれ旁かたと仁愛あつ厚あひろき挨拶に。美作も力ちからヲを得。ハア重々深き御懇精こんせい。然らば暫時さんじの御猶予ゆうよ。ホ、
 心静しずかに詮義か肝要かんよう。御上使様には御退屈たいくつ。奥の一間で御酒一献けん。御肴にはふつ、かな女共か舞謡まいうた。打くつろいて御見物。
 此学太郎は詮義の手配くばり。自みづからは又饗もてなし応の。役義やくぎの人品しんひん赤松か。後刻と計式けいしき礼し。美作夫婦引添つかりて上使は。奥へ入にけり。
 引違ひだてお次より。立出はる松浦軍蔵。イヤ申若殿様。兼て仕込しこみし御大望。邪魔じゃまに成瀬左衛門めはぶち殺す。宝はこつちへせし
 めて置。何から何迄よい手つかひ。うまいうまいと主従しゆしゆ点しんき囁ささやきあふ。折をから表騒さはがしく下カリおらふ。下れく下カ
 らぬかと。留うてもいふても聞はこそ六十余りの五調かんせう（八十九ウ）親仁わが藁わらふ。わいかけ奥庭おくでん先。何の遠慮えんりょもぼつかば
 かくくばかく。ハテ扱合点くわくあひてんの悪い人しやわいの。何ぼ下れくといやつても。学太郎様にお目にかゝり。めつき

しやつきをせにや成ラぬ。とやかふ云ハずとコレ若殿に早ふ逢して下されと。云地ウつ、這入切戸口。見合ハルす顔は。ヤ学詞太郎様。ム、梅ばら徳太夫。ハテ久しやと若殿地ウの。したしき詞ハルにしたり顔。イヤコレ若殿様。アイヤ学太郎様。エ、こなたはくく色のふ。六十越ナリした此親仁地ウめに。命がけの大事を頼。仕負おせたらはほうびの金。知行イヤじやのと働はたらせ。夫レ成に投やり三寶。けふが日迄に音沙汰おとさたも。なしも礫つぶも打しやれぬは。フ、結構けつこうなお歴々れきき。尤後日の合紋に預あづかり置おかしやつた二品地ハルはといふを打消ハルコリやく親仁色。此方詞より音伝おとつれせぬは。深い所地ウ（九十オ）存有ての事。万事は身共地ウか此胸地ウに。心得地ウたるかと目ませと仕方ハル。イヤナ下部共詞。用事あらは呼出さん。皆々下地ウれに下部共ハル。打連部フシやに入にけり。

跡見送地ウつて軍蔵ハルは。徳太夫地ウが傍そばに立寄詞て。扱々おとつれ我はあやかり者。一大事の御用を仕負おせ。ほうひは山程下さるゝ。シテ件くだんの御宝は。お氣遣イなされますな。コレ此菓地ウふ地ウこにと。取出地ウす柴船の花生御簾ウも俱に。学太郎ウが前に押直せば。ほくくハルと打点色き。ホ、出かしたく。ほうび取せんこなたへと。いふに様子地ウも白髪しらの親仁に腰かめて蹲踞うつくまる。油断ウを見すまし軍蔵が肩先かたずつばと一ト刀。切ハルれながらもがむしやの老人ろうじん。何科色有て欺なまし討と。刀たぐつて投捨ウる。首筋ウ掴ハルんで学太郎。取て引寄こほり氷やいばの刃胸ナ元トぐつと。一ト多ウフシめぐり。（九十ウ）フ、ハ、ハ、ハ、もがくはく。ほうびに目がくれうかくと。殺されに來たおいばれ。蛙かいは口からハテよいざまと。なぶり殺地ハルしに徳太夫。無念く地ハルのあをち死ウニ。むざんといふも愚也。

死地ウがい地ウを傍への古井戸へ井打込色サアよいは。二品詞の御宝御手に入は地ハル大望成就たいぼうじゆう。片時へんしも早く御上京と。申上地ハルれば成程く。汝ウは急ぎ供触の用意せよ。ハツト計に軍蔵がいさんで次フシへ走り行。跡見送地ハルつて学太郎。年詞ン來仕込し我大望。早枝家を相続さうぞくすれば。采女之介は有てなき者。ねかさふ起さふと皆是身共まか心の俣力。力俣まならぬは傾城けいせい三国め。とこいつをなびける

一ト工面。ム、是をかうしてかうくと一人点く笑の眉。開く襖の。内よりも。三国太夫はけふの役。天の羽衣脱かへて襦姿たをやかに夫レとは見れど付ほなく。立寄塩瀬（九十一才）べに帛紗。おふくかげんと差出す。

何心なく取上る。薄茶にあらぬ恋人の。顔見て恠り学太郎。ホ、三国。有難いそもじか手前。併我を薄茶にもてなして。心の庭は井戸茶碗。深き采女へ濃茶をは。立る所存で有ふかなと。問かけられ。今更何と返答も。云いそゝくれてもぢくと。

顔に照添紅ニぶくさひねる手元を。じつと取。いつ見てもく美しい御面相。コリヤよふ聞よ。我カ首たけ惚て居ればこそ。舞子と名付呼寄しも。くとき落そふ我心底何と憎ふは有まいかな。采女之介は宝を失ひ。詮義仕出さにや身の越度。又嫌は

れた此鼻は。今シ日上使を下されて。追付早枝の大殿様。そもじさへ合点なりや。直くに我女が御台様。サアどふしや。くと学太郎。細目に成て見とれ居る。アイ是迄度々（九十一才）御真実に。いふて給はるおまへのお詞。仇に聞てお

りましたは。采女様へ立た義理。其殿様が又外に。増取有て見かへられ。本シに身も世もあられぬ悲しさ。死んで退ふと思ひしが。イヤく是からこつちも意地。あなたに随早枝家の御台様じやといはれなば是ぞ殿御へよい頬当と。思案極メてけふの役。是幸と此お屋敷。来事はきても御きげんが。もしやと案じた程もなふ嬉しい逢せと寄添てもたれかゝりし。柳花雨をおびたる。風情也。

取て突退学太郎。あんまり恋路が味過て。めつたに応とは云いにくい。エ、コリヤ何じやな。某を欺からんと色でしかけて落し穴。憎ッいめろうめ。此館に置事叶はぬ。早立帰れ。遅ひと身共が手にかくると。思ひがけなき一言に。三国はわつと泣出し。采女様には見捨ら（九十二才）れ。又あなたには疑イ受。生きてかひなき私が身。お手にかゝるがせめての言訳。

サア討^色タしやんせくと。首差廻^ウし覚悟^{フシ}の体。エ、いふにや及ぶと振^{ハル}上て。サアくと二三度四五度。モウよい三国。
疑はれた。エ、。そんならほんまに疑は。はれた所か二世迄夫婦。エ、忝いと抱^{地ハル}付^キ。じつとしむればしめかへし。恋^{キシ}に
心も。乱^{フシ}糸。思案^{フシ}の外の迷ひ也。

油断^{地ウ}を見すまし懷^{ハル}より。引出す手先しつかと押へ。ハテ合点^調の行ぬ女め。此二品に心をかくる。扱は采女が廻し者。ヲ、采
女様と契約^{けいやく}し命を捨て此詮義。心を尽せしかひ有て。見顕^{ミケン}したるお家の御宝。サア尋常^{しんじやう}に渡したく。ハ、ム、ハ、ハ、ハ、
わりや此二品がほしいか。ホ、ほしかろな。しほらしい志^{こころざし}にめんじ渡して呉^{くれ}たいかマアならぬ。叶はぬ事と諦^{あきら}めてコリ
ヤ。なびきおれ。くと。しなだれ^{地ウ}（九十二ウ）かゝる。油断^ウを見すまし突^つかくるを。ひらりとかはす扇^{ハル}の手。奥は響^{もてな}應^お鼓^こ
の音^{おと}こへものどかに。聞^上へける。秘術^{ひじゆつ}と尽せと女業^{わざ}。なんなく刀ナ打落^ウされ。既に危^{すで}く見^{フシ}へける所に。ヤレ聊^聊等有な暫^ちく
と。赤松^{地ウ}民部之介藤忠。美作^{ハル}夫婦引添て立出給へば学太郎ハット。計に平伏^{フシふく}す。其女詮義^{地ウ}有^色。ソレ引立よと云渡し。藤忠詞
改て。イヤナニ学太郎殿。早枝家の重宝たる二品。貴殿の手に入しと一間の内より窺^地ひ聞。急いで内見^{けん}致さんと詞に。ハッ
トうやく敷^中上使^中の。前に押直^{フシ}し。二品の宝出る上は。弥早枝家の相続。我等に仰付^詞させられ下さる様。御前宜しく御取^な成。
御吹^{すいきよ}拳願^{けん}ひ奉ると。いふに藤忠打点^{地ハル}き。二品とくと相改^中。ホ、連手^{あつぱれ}（九十三オ）柄。相違^{さうゐ}なき此宝。某請取我君へ早速差上
奉り。家督^{かとく}相続^{あんで}安堵^{あんど}の御教書。藤忠計ひ。得さすへし。片時^詞も早く上京有。ハッア有難^{しな}き御仰。然^{しか}ば衣服改直^し様上京仕
らん。御上使には御苦勞千万。親人様。兩人さまにも先ッおさらば。ヲ、目出^{フシ}たいく。コリやく女共。衣服上下早々持。
ハット答へて秘共。てんでに着する上下のさもさは。やかに出立^{フシ}て。ヤア者共。馬引やつと呼^{地ハル}はれば。ハットこたへて軍藏

が。栗毛^{フシ}の駒を引出す。

手綱^{地上}はいくりひらりと乗。仰^詞に随ひ某は一先ッおさきへ上京致す。追付目出度御対面。イサ軍威^{ハル}と勇^{フシ}立都の空へと急行。

跡見^{地上ノル}送つて賤機御前。目に持涙はら〜〜と^{スエテ}め兼させ給^中ひしが。何思ひけん懷^{くはいけん}釵^{めく}を抜より早く。我と我。咽へがばと

突（九十三ウ）立る。コハ何故と驚^{ハル}民部美作大きに仰^{地上}天し。コリヤ賤機。御上使の手前と云イ目出度^詞が門出に。不吉の

所為何故と。いふ顔^{地ハル}つれ〜打守り。いたはしや我夫。学太郎が門出を。お前は出世と思し召か。アリヤ此母か拵^{こしら}へ事。

家国の為いとし子を。欺^{たほか}りすかしてむざ〜と。殺させにやるのじや物。何と死ずに居られふぞと。聞^{地ハル}て恠りとは何故に

とはいかに。子細を語れと氣をいらつ。手負^{ハルフシ}は。苦^中しき息の下。エ、何故とはコレ殿。七万石の領主にて。榮曜^{あいうまういほ}榮花の学太

郎。何が不足で此工ミ。采女殿を科^{とか}に落し宝を奪ひ。早枝家を押領せんとの企^{くはだて}を。聞度々に自^ウが。胸に釘針さゝるゝ心。

異見^{地色ハル}も有へきお前迄惡事に一味も子故（九十四オ）の闇。所詮^ウ我子が安穩^{あんおん}では。家国の為よからずと。心^ウ一つに思案を極め。

出世の門出目出たしとまざ〜偽^{たほか}り欺^色つて。兄の敵と喝^色兒に。本望^{とけ}遂させ討^{あつはれ}れなは。適^{地色上}最期は武士成と。是迄なしたる

積惡の。汚名^{おめい}もすゝぎ二ツには。妻^詞子二人が先立^色ば。一^一念^{ほつき}発起も仕給ひて。お心も直らんかと。夫^{地色上}ればつかりを樂しみに。

覚悟極めた我自害。少しは不便と思し召采女様との御和睦^{わぼく}。調^ウへてたべ殿様と。或^ウいは諫^{いさ}め或^ウいは歎^いき。貞女^{ていじよ}の誠鍛^{きた}ふたる

刃^{やいば}につたふ。血^{ハルキン}の涙^{中ナル}膝^{ハル}に。測^{ハル}なす計也。美作^{地ハル}は齒^はがみをなし。セエよしなき女が道^詞チ立^ウから。大事を洩^{もち}す其上に。愛子^詞を

失^{きつぐわ}ふ吃悔^{地色ウ}さ。イテ追付てと欠出^ウす。向^ウふにすつくと采女之介。庭^ウには定平二王（九十四ウ）立勢^{フシ}ひ込で詰^詞寄る。ヤアうぬ

は采女之介。身が屋敷へはいつの間に。ム、此奴が葛籠^{つちら}の正体。若殿諸共入^詞込だり。覚悟〜といはせもあへず。ヤアうづ

虫めらがほざいたり。よし／＼^{ハル}紛は討する共。御宝うぬに渡さふか。みぢんになしてくれんずと二品目かけ飛かゝる。どつこいそふはと民部之助宝をかこふてつゝ立たり。ヤア今迄一味と思ひし藤忠。儕しも敵の廻シ者よな。ホ、云フにや及ぶ。奥様と申合して此二品。まつ斯奪はん謀。首尾よふ参つた上使の正体。お目にかけんと上下上着かなぐれば。下は木綿の町人姿。私めは九郎兵衛と申者。奥様に大恩受し糸商人。いつぞや早枝のお中屋敷。裏門通の水門より出たる曲者。顔は知ざるくら紛れ。儘に梅原徳太夫と。聞たら拔ぬ地獄耳。詮義の糸口奥（九十五才）様の。お差図請た贗上便。何卒御恩を報ぜんと。思ふ折からけふの役。まんまと仕おふせコレ殿様。悪事露頭の上からは。今より心をひるがへし御両家和睦といや応を。いはさぬ此場のしめくゝり実も糸屋が働き也。

采女之介声高くヤア／＼美作。迎も斯成貴殿の運命。今討取は安けれ共。賤機御前の貞心にて宝の二品手に入悦び。互の意恨は後日の再会。是を未来の土産にて成仏有や賤機と。哀レを跡に采女之介。定平九郎兵衛御供にて。しづ／＼采女は出給ふ。

思へは無念と美作か。欠出す裔に絶付。手負も今ぞ。断末魔哀。墓なやへ浮世也

第十一

かゝみ山街道筋。誰レが菩提に建置し閻魔堂を其俣に。仮りの此世の仮り住居罪も作らず草鞋（九十五ウ）を。作る片手にせんし葉を施すも又前キの世の。罪亡しと見へにけり。

所の者共てん手に簪ふりかたけ。マア一休ミと床几の上に腰打かけ。イヤコレ修行者殿。こなんはマア何の願かしらね共。

往來の人に藥を施すとは。きつい功德じやのふ。イヤモウ何の頼でもないか本の志。此様に置いて下さりますので。私も悦びます。どふて此上ながら何かお世話でござりませふ。何の世話所が。村中がこな様の世話に成て居様な物じや。聞キや若イ者共がこな様に毎晩棒^{ぼう}を習にくると庄家殿の噂^{うわさ}。そこでおらも負けまいと。寝所でかゝをとらへ持まへの棒で。下稽古^{けいこ}して居るわいの。ハ、ハ、ハ、と咄^はし半へ。遠音^{とん}にひゝく数多の人声。喝^{はく}儿^に耳^ををそば立て。コレゝ皆の衆。けふはどれやら大名のお通りと云フ事。ソリヤマアどなでござります。本に忘れて居た。俄^{にわか}にきのふお触^{ふれ}の有た。大道寺の学太郎というわんぱく(九十六才)殿が。京へ登^{のぼ}ラしやる次手住吉へ参詣と。大抵やかましい事じやない。油断^{しつ}して呵^かれまい。ござれゝと打連立^{うちれんりつ}住家ゝへ立かへる。

聞^{きこ}より喝^{はく}儿^に勇立^{ゆうりつ}。日頃^{ひごと}の念願時^{ねんがんとき}至れりと。頭巾衣^{かぶとえ}もなくなり捨^す。鎖鉢^{さく}卷^{まき}引しめゝ拝領^{はいりやう}の。わさ物腰^{ものこし}にほつ込^こで。杖^うに仕込^{しこ}し鍵^{かぎ}追取^{おひとり}。昔^{むかし}に返^{かへ}る立派^{りつぱ}の出立^{しゅつぱつ}。行列^{ぎやうりつ}遅^{おそ}しと待かけしは健氣^{けんき}にも又潔^{いさぎ}よし。斯^こと白砂^{はくさ}踏^ふ立て。お先手^{さきで}をふる徒若^{とわ}党^{どう}。威義^{ゐぎ}嚴重^{じやうじやう}に学太郎。備^つへ乱^{みだ}さずさしける。行列^{ぎやうりつ}半行^{はんぎやう}過^かさせ。乗物^{のりもの}目かけ分入^{ぶんい}は。スハ狼藉^{ろうじやく}者^{しや}引立^{ひだて}んと欠寄^{けつき}大勢^{たいせい}左右^{さうりやう}へ投退^{てうたい}。鍵^{かぎ}かい込^こで大音^{おん}上^{じやう}。ヤア強惡^{かうあく}無道^{むだう}の学太郎汝^なか故^ゆに相果^{さうくわ}し。唐橋^{からはし}瀬左衛門^{せざゑもん}か弟^{てい}同田作^{どうでさく}十郎^{じやう}定元^{じやうげん}。兄^{あに}の敵観^{てきくわん}念^{ねん}と乗物^{のりもの}目かけ欠寄^{けつき}を。かけ隔^へたる近習^{きんしゆ}の面々^{めんめん}事共^{ことども}せず。踏込^{ふみこ}踏^ふしめ從横^{じゆうぎやう}無^な尽^{じん}。暫^{しばらく}し時^{とき}をぞへうつしける。

刃^{やいば}は名作^{めいさく}手練^{てれん}の唐橋^{からはし}。忽^{たち}頓^{とん}死^し三十八^{さんじゅうはち}人^{にん}手負^{ておひ}の者は数^{かず}(九十六ウ)知^しす。皆ち^{みな}りゝに逃失^{にうしつ}たり。残^{のこ}るは乗物^{のりもの}ござんなれと鍵^{かぎ}追取^{おひとり}て御簾^{ごれん}の間^{のま}より。くつと手^てごたへ其^{その}俣^ひに引出^{ひきだ}し見^みて。シヤコリヤ是^{こゝ}松浦^{まつら}軍蔵^{ぐんざう}。扱^あは学太郎^{がくたろう}は逃廻^{にがへ}しかハア。はつと仰天^{おうえん}腰^{こし}も抜軻^{はく}果^{くわ}てぞみへけるが。セエ口惜^{くしやく}や浅^あましや。斯迄^{こゝ}尽^{じん}せし兄^{あに}の怨^{うら}。廻^{まわ}り逢^あは逢^あながら。討^うもらしは残念^{ざんねん}や。当天^{てんてん}神正^{しんじやう}八

幡も見放し給か情なやと。天にさけび地に転び挙も碎る血の涙哀と。いふも愚也。

ぜひとまなや是迄と刀逆手に取直す。ふしきや傍への草村より。一煙もゆると見へけるが。ハテ怪しや。五体すくんで働られぬは。ヤア夫なるは過去し孫一が靈魂成か。何故生害を止しぞ。子細有てか何とく。ヤ、スリヤ学太郎が足を止しとや。シテ又敵はいづくに有。ヤ、ナニ中道筋の森の内。シエ、有がたし忝しと。天にも上る心地にて中道。さして行先の

森の茂みに学太郎。安否いかと心も空案る姿唐橋が。一目見るより欠来り。(九十七才) ヤア比興未練の学太郎。逃隠る、共天命逃れず。サアく勝負と詰かくる。返答もなく拔打を。飛しさつて突かくる。鎗術鍛術互の手練。血氣勇氣の劣なく棒にもんでそへ越しか。天理の枝先に非道の学太郎。ひるむを。透さず脇腹より纔なる一木に突立られ。狂ひ死に死たるは報の程こそ恐しき。かゝる所へ采女之介磯松新次郎。定平引連欠付給ひ。ホ、唐橋適手柄。簾花生も手に入しと。仰にハット差出す一軸。新次郎取あへず奥方なき学太郎様の御最期。奥方の御遺言御本家への願イ叶ひ。則大道寺の家督采女之介様に御相続と。宝揃へば悦び多賀。寿。国入や早枝の家の御繁栄。百万石の蔵入と目出度。筆を納めけり

寛政九年己四月廿三日 作者 奈河七五三助(九十七ウ)

右之本頌句音節墨譜等令加筆候

師若針弟子如縷因吾

儕所伝沂先師

翻刻『会稽多賀堂』

之源幸甚

竹本義太夫遺弟

竹本政太夫印

予以著述之原本校合一過可為正本者也

正本所江戸堀江町四丁目
日本橋四日市多田屋理兵衛版
上総屋利兵衛版